



Title	宮本百合子『伸子』から「一本の花」へ
Author(s)	貝澤, 由紀
Citation	層 : 映像と表現, 14, 114-133
Issue Date	2022-03-24
DOI	https://doi.org/10.14943/101732
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84720
Type	departmental bulletin paper
File Information	14_07_114-133.pdf



宮本百合子『伸子』から「一本の花」へ

貝澤 由紀

はじめに

宮本百合子の小説『伸子』（改造社、一九二八年）¹は恋愛、結婚、家庭を巡る葛藤や出来事が百合子自身の経験に即して自伝的に描かれた作品である。これまで『伸子』は様々な形で論じられてきた。岩淵宏子は伸子が他者との関係を通して自我を確立しようとしているとともに、積極的な対関係への希求を持つ存在であるとしている。そのため制度としての恋愛結婚の問題を浮き彫りにし、「離婚の自由」へとすすみでる新しさがあると評価している。²このように伸子は主体的な女性としての評価を受けることが多いが、伸子の言動の矛盾に言及した研究もある。遠藤伸治は伸子が仕事面でも共感のあつた父親の〈男らしさ〉が夫である佃の中に再生産されることを望みつつ、

佃の存在によつて象徴的な意味での〈母殺し〉として母親との関係を断ち切ろうとしており、そのために伸子は主体を志向しながらその責任を負わない非論理的で、曖昧で、両義的な存在であると指摘している。³一方で作中人物のみならず百合子の日記や雑誌連載時の『伸子』の原作とも言える作品から実証的に『伸子』の創作過程に着目した研究もある。

なお、『伸子』は原稿用紙約三〇〇枚分の削除と約二〇〇枚分の加筆を経て『伸子』として発表された作品であり⁴、改稿前の作品は雑誌『改造』（改造社）に掲載されていた⁵。本稿では雑誌初出として表す。雑誌掲載時のタイトルは以下の通りである。

「聴きわけられぬ聲音」（一九二四年九月号）

「冬眠」(十一月号)

「揺れる樹々」(一九二五年一月号)

「小さい雲」(四月号)

「蘇芳の花」(六月号)

「崖の上」(一〇月号)

「白霧(一)」(一九二六年一月号)

「白霧(二)」(二月号)

「苔」(四月号)

「雨後」(九月号)

津田孝は『伸子』と雑誌初出とを、夫である佃に対する伸子の感情の動きを軸に比較し、改稿によって佃との結婚生活への不安が強調されていることを指摘している。ものの、百合子の実生活に踏み込んだ分析がなされておらず、改作が百合子にとってどのような意義を持っていたのかは明らかにされていない。また、岩淵は雑誌初出と『伸子』、『伸子』執筆期の日記との比較から『伸子』の創作過程について論じている。岩淵は百合子が日記中において『伸子』や雑誌初出で描かれていない夫との性的不調和を記していることを指摘している。そのうえで『伸子』では恋愛成立過程での理性に先行する愛や性欲といった官能の問題を回避している点に百合子の作家的弱点があると

している。一方で理性では捉えきれない自己の深層を削除したことは百合子が日本の家庭や社会における道徳的慣習を批判し自我を確立するという普遍的なテーマを『伸子』に与えたとして評価している⁷⁾。いずれの先行研究も改作が『伸子』にもたらした効果について論じているが、改作や日記から見えてくる作中人物とそのモデルとの差異や、改作によって切り捨てられた内容への考察に課題があると言える。特に百合子が『伸子』で切り捨てた官能の問題には『伸子』執筆期に生活を共にしていた湯浅芳子の影響や、内容の詳細は後述するが『伸子』と同時期に描かれた「一本の花」(『改造』、一九二七年一月号)⁸⁾で展開される官能というテーマへの結びつきが強く見られると筆者は考えている。また作中人物とそのモデルの差異を百合子の日記や書簡、他作品から探ることは、百合子の主観が含まれる以上限界があり、『伸子』が小説である以上その登場人物に作為性があるのは当然のことである。しかしながら作品と比較対象となる短編小説などの相違から百合子が理想とした在るべき自己が伸子に如何に反映されているかを探るうえでは意義がある。

そこで本稿は『伸子』の作中人物である佃の人物像の変容を雑誌初出と『伸子』、同時期の日記及び書簡⁹⁾との比較から提示し、百合子が自身の肉体的欲求や女性の芸術性と社会的役割

に対してどのような葛藤を持っていたのかを考察する。そのうえで『伸子』の最後の場面に現れる「官能の嵐」が百合子にとってどのような意味を持つのかを示し、「一本の花」によって百合子が持つ肉体的欲求への葛藤が如何に昇華されたのかを明らかにする。同時に百合子の性に対する女としての自己意識の変遷と伸子に託された理想の自己像を探る試みである。

一 改作による佃の変容

まず雑誌初出から『伸子』への改作によって、『伸子』の作中人物である佃の人物像にどのような変化があったのか探っていく。

百合子は一九一九年、遊学先のアメリカで知り合った一五歳年上の古代ベルシャ語を研究する荒木茂と結婚する。『伸子』は百合子の荒木との結婚から離婚に至るまでを題材とし描かれており、荒木は『伸子』の作中では佃一郎として登場する。

伸子と佃の出会いにはニューヨークでの日本人学生倶楽部の集会であり、伸子は出会ったばかりの佃の印象を「陰気」だとか「貧しさ」という言葉で表現している。「彼の顔にあるものは、決して多くの人々が持っているような得意な男の快活さでもなければ、雄々しさでもなかった」（三巻、一四頁）が、伸子は佃

の持つ他の男性には感じることにない陰や孤独に魅了された。『伸子』の本文中では佃の服装や容貌の描写からも佃の異質性に惹かれていることは明らかである。また、伸子は佃の専攻する古代の印度・イラニアン語という学問分野へも興味を示す。

伸子は佃との交渉が始まってからの四ヶ月間、佃のはつきりと自身の不平を言わない態度や佃が伸子の周囲へ向ける嫉妬に苦痛を感じていた。そして伸子は佃を愛し佃に愛されていると考えることによって「たっぷりした精神の落着きと希望」（三巻、六五頁）を得るが、佃が絶え間ない内心の不安を持っているように感じるのである。そこで伸子は佃を安心させ、二人の感情をともに健やかに育てていくためには結婚しかないと考え

る。しかし伸子と佃が結婚し、帰国後伸子の実家である佐々家で暮らすようになって、伸子から見た佃は何も変わらず、「互の愛によって一層の生活の力を感じ合い、扶け合って行く、平和な、同時に高貴な輝き」（三巻、六五頁）を得ることは出来ずにいた。佃は伸子の両親とも馴染もうとはせず、二人は家を出ることになる。そして『伸子』は終盤に向かつていくにつれて、佃に対する嫌悪を示すテキストが増えていくのと同時に、女を妻として所有しようとする良人として世間の男と佃の同質化が行われていく。

がぬけた。佃はそれを離さない。

(中略) 彼は、外套や何かを寝台の裾に落した。磁石が牽くやうに、ぴつたり彼女に向つて居る顔は、苦痛を現して歪んで居る。何といふ眼！

伸子は、胸に落ちかゝつてきた佃の顔を、母親の温情と恋人の忘我の混り合つた熱情で、優しく、うつとりと愛撫した。(二月号、七四―七五頁)

この記述からも雑誌初出においては、佃が流行性感冒に罹つた伸子を献身的に見舞い、それが恋愛感情によるものであつたように描かれていることは間違いない。しかし、『伸子』が書籍化される過程で行われた改作では伸子にとつて佃の良かった所はほとんど引き継がれなかった。

改作における佃との恋愛期の削除については先行研究でも言及されている。『宮本百合子選集』第六巻の百合子自身によるあとがき(一九四八年一月)において、百合子は「男女の結合こそ愛とよばれるべきものだ」と信じている一人の生活的な女にとつて、当時の日本の通念であつた家庭の平和の觀念や、夫婦愛家庭愛における女の無主張の立場は恐怖を与えた。(一八巻、一三八頁)と述べている。佐藤静夫は『宮本百合子選集』第六巻のあとがきを踏まえ「当時の時代の現実とあいいれな

い苦惱」を書く事が『伸子』の主題であつたと考えられると指摘する。そのために、『伸子』は苦惱を中心に描く必要があり雑誌初出での前半部の結婚に至る細々とした経緯を描く必要性はなかつたとして¹⁾いる。しかし、佐藤が指摘している百合子のあとがきは『伸子』執筆から二〇年以上経た一九四八年のものであり、『伸子』執筆時の百合子の心情を投影したものであるとは言い切れない。そもそも『伸子』において結婚までの二人の仲睦まじい様子を省略することが、苦惱を描いたことにならぬのだろうか。むしろ、恋愛期の盛り上がりといひの愛情への期待が明白にされた方が、それらが失われ二人の関係が連れ崩壊していく苦惱がより明白になると言える。

また、『伸子』では伸子と佃の恋愛期は登場せず、佃への愛憎相半ばする感情と家庭や結婚による妻という立場に対する葛藤をふんだんに盛り込んでいる。特に雑誌初出との比較により恋愛期の削除によって、百合子の結婚が恋愛という感情的な要素が排除された、理性的な理由によるものとなつている。伸子の佃への関心はその異質性と学問分野に対する知的好奇心であり、結婚の理由は「たつぷりした精神の落着きと希望」(三巻、六五頁)を得るためであることが強く印象付けられている。一方で恋愛期の削除に加え、百合子は自身の内面に抱える大きな問題を削除していることによつて、雑誌初出の佃と『伸子』の

佃の人物像に差異が生じている。

『伸子』が家を破る女、新しい女の小説として評価される理由の一つに子どもを持つという家庭を持つ再生産の役割を望まない点が挙げられる。佃にプロポーズした際、伸子は子どもを作らないことを条件とし、佃がそれを了承する事に佃を理解あるものとして満足する。その理由を『伸子』では仕事を優先したいという姿勢と本能的に怖いと述べるに留まっている。また伸子の祖母たちが子どもはまだなのかと聞いた際には、ちょうど自身の「定りが半月も遅れている」ことに神経質になり、「自分を縛す権利を持っているかも知れない子どもを持つたら、どうなるであろう。」(三巻、二〇九頁)という不安と同時に本能的恐怖の原因を「佃を夫とする刹那、自分の裡にある女性が、彼を父としては承認できない者だと見抜き、拒絶したのかもしれない」(三巻、一一〇頁)と分析している。一方で、『伸子』では「男のひとに、このこわさ解るかしら……こわくて堪らなくなるようなものがあるの、本能的に——」(三巻、八〇頁)とのみ記述された本能的恐怖について、雑誌初出の「揺れる樹々」では以下のように詳細に記述されている。

特に、母が女性として背負つて居る分娩の任務、子供に對する責任の重さは、十代の伸子に恐怖を抱かせた。「結婚

すれば自分はあの恐ろしい目をして、更に恐ろしい母親とならなければならぬだろう」伸子は、両親が自分達の教育について意見が合はず論争した揚句、いつも母が涙を流し乍ら訴へる言葉を到底忘れることが出来なかつた。

「よくお考へになつて下さい。貴方は二言目には私の教育が悪いと仰云るけれども、子供達は私ばかりの子ではありません。皆が佐々家の遺伝を持つて居ます。それはどうしたら好いのです？私が母親だからと云つて不可抗な其那ものゝ責任まで負はさうとするのは、あんまり酷ぢやありませんか。好きで嫁に來たのでもないのに！」

(中略)母が激し、現に子供等の裡に現れて居る家族的遺伝を殆ど復讐的な正確さで父に指摘するのをきき乍ら、伸子は自分の裡に見た事もない祖父や曾祖父の性癖や傾向の一部が活き蠢いて居るといふ気味悪い不幸な心持を抱いた。(一月号、七一頁)

この「揺れる樹々」の記述から伸子が子どもを望まなかつた原因は、伸子が自身の母のようになることへの恐怖であつたと言える。このような百合子と母の関係に端を発したと言える親になりにたくないと感じは『伸子』執筆時期前後に書かれた日記からも読み取ることが出来る。百合子の一九二二年一月六日

の日記のなかに母が子を熱愛することに對し、「子供に生命支配され、支配しようとする」(二六卷、三一九—三二〇頁)とある。やはり自身の存在が母の精神的な部分を大きく占めていることを感じてきた百合子が、自分も子によつて支配されていくことを恐れていることが分かる。

また、百合子が母である中条霞江の死に際し、一九三四年に書いたとされる「母」¹²の中では父と母が衝突するときのことを回想し、『本能的に父の側に立つ九つ歳の娘に向つて母は「お前はお父様の子だ。お父様と一緒にどこへでもお行き!」と涙をこぼしながら叫んだりした。』(一一卷、三八〇頁)と記されている。そして、このような百合子の幼少期は感情的な母対理性的な父という構図を百合子の中に生み出したことは確かである。以上のように百合子が母親になるということに本能的恐怖を持つていたことは明らかであるが、この本能的恐怖の具体的な中身は『伸子』では描かれない。そのうえ、百合子は改作によつて本能的恐怖について述べた箇所を削除し「伸子は、自分がむらのひどい性質を持つて居ると自覚してゐたから、この遺伝といふ考は一層可怖かつた。」(一月号、七一—七二頁)と雑誌初出の中で描いている自身の母由来とも言える性質をも隠蔽している。

この本能的恐怖の削除について沼沢和子は『伸子』の雑誌初

出では、母親になることに對する伸子の本能的な恐怖が少女期に遡る根深いものであり、母から娘へと伝えられる女性の身心に切実な感覚であるとわかるが、現行『伸子』では子どもを持たない理由を制度的結婚に對する疑問と、仕事と愛の両立を求めざる模索に集中しているためにそれが伝わりにくくなっていると指摘する。このことによつて『好きで嫁に來たのでもないのに!』という母のルサンチマンの涙も追及されず、「母多計代は内助の功によつて佐々家に繁栄をもたらしたと自負する家庭の主宰者であり、(中略)果立とうとする娘を自分の支配下にとどめようと振る舞う」存在として読み手に受け取られることになつたと述べている¹³。しかし、改作によつて本能的恐怖の具体的な内容が削除されたことで、「彼を父としては承認できない者だと見抜き、拒絶したのかもしれない」という記述ばかりが残り、最も印象操作されることになつてしまつたのは母の多計代ではなく佃ではないだろうか。岩淵宏子も父として承認できない佃は雑誌初出でも描かれているが、改作での本能的恐怖の削除によつて、『伸子』での子どもをめぐる問題は佃にとつて不利なものとして書き換えられたと指摘している¹⁴。

この子どもを持つ持たないという問題のなかで語られる本能的な恐怖は、日記でも雑誌初出でも明らかに百合子と両親の關係から端を発したものである。しかし百合子は子供を産みたく

ない最大の原因である本能的恐怖を隠蔽し、荒木にとって不利な父親になる資格がない男としての偶像を作りあげた。そして、この本能的恐怖の隠蔽には母親のような自身の感情的性質を、伸子を通して排除しようとしたためであるとも言えるだろう。また、実生活においては子どもを持たないという条件は百合子に『伸子』では詳らかにされない肉体的欲求への葛藤を生み出すこととなる。

二 肉体的欲求と女性の芸術性への葛藤

一九二〇年から一九二一年にかけての百合子の日記では、自身のうち沸き上がる肉体的欲求について以下のように記されている。

彼に対する魂の愛が深いにマコ比較して、肉体的にも深い熱望を感じる。時には殆ど情欲とも呼ぶべきものだと思わずには居られない時がある。そう云う(気分)から脱すべきである。其を知って居る。が、彼をしつかりと抱き締め、深い二人の祈りの中にでなければ、自分の此の苦は完全に離脱しないと云う心持さえする。(二六卷、二七七—二七八頁)

○結婚生活に於て最も自分を苦しめるものは、情慾、或は愛慾の表現である。——此は肯定する。然しこれが若し相手を苦しませるものなら第二義に明にされるべきものではないのか。

此に苦しむと、自分は、結婚迄に至つた自分の動機に対しても深い疑を感じずには居られないような心持がする。

(二六卷、三四〇—三四一頁)

百合子は結婚当初から自身の肉体的欲求への衝撃と不安を持っていた。そしてそれは荒木との関係が陰りを見せるほど、結婚が愛と肉体的欲求の混同によるもので、荒木へ惹かれたのは愛のためではなく、肉体的欲求によるものではないかという疑問へと変化していったと読み取ることが出来る。このような百合子の自身の肉体的欲求への葛藤というのは、結婚という制度のもとで、本来であれば再生産のために行われるはずであった性交に、子どもを持たないという条件を荒木に突きつけたことで生まれたものであるとも言えないだろうか。既に荒木との関係が悪化していた一九二三年五月二三日の日記では以下のように記述している。

子供を生まない夫婦は、あらゆる意味に於てむずかし。

一、とにかく自分達で世話をしなければ死んで仕舞うと云う哀れな、弱い、愛らしいものは持たない。

二、故に、互が互を見る。性交と云うことその他に根本的な疑問が生じる。ぼやかされる子供が居ないから。此時期、二人が真個に人としてよい結合——性的自墮落にもならず、冷淡な利己主義者とならず、心の友、自然な陰陽の一对として、淨く結びつくこと——が出来るか出来ないかの別れ道となる。

三、男は野心的な仕事熱中病につかれる。女は、家の暖さにかつえて、肝心の仕事さえ手につかなくなる——仮令子は生めず、仕事はあつても、女には少くとも自分の心には、家の輝やかしさ、明るさ、歡びに、無限の渴望を持って居る。男は、それをすっかり二義的に出来る傾向がある。女には、第一義的なものの一部分、或時は力の源になることさえある。(二七卷、二一七—二一八頁)

百合子の肉体的欲求の葛藤と荒木に対して感じていた性的不調和の要因は、結婚前に自ら提示した子供を持たないという条件と夫婦の性交の間に生まれる「性的自墮落」に陥る可能性に対する嫌悪感であったとも考えられる。百合子は自身の仕事を優

先したいという姿勢、子どもを持たないという条件と結婚をするという矛盾に悩まされてきた。しかし、百合子は日記の中で自身の肉体的欲求や荒木との性生活への度重なる不満と不安について言及していながら、雑誌初出に加え、『伸子』でもほとんどこの問題に触れていない。

雑誌初出と『伸子』ではわずかに夫婦の性生活の問題に関して「彼らの間では、夫婦関係も、自然さを失っていた。家族主義的な希望もなければ、原始的な欲望の燃え上がりから生ずる淨らかな力も欠けた。佃の恩恵的な、ある時にはそういう行為さえ、伸子のためと云いたげな感情を感じるのは、伸子にとつて苦しく、屈辱であった。」(三卷、二七五頁)と記述されている程度である。

岩淵も百合子の日記中から結婚初期から荒木との性的不調和があつたことを指摘し、百合子が『伸子』の中で日記に描いている性に纏わる相剋を全く描かなかつた要因として、四点を挙げてゐる。一つは時代の問題、二つ目は荒木への配慮、三つ目は百合子の創作技法の限界、四つ目は理性で理解できない不明な部分を一刀両断に切り捨ててゐるためであるとしてゐる¹⁵。

岩淵の指摘のうち時代の問題と荒木への配慮という点は、接吻の場面が伏字になつてゐることから考えても確かである。一方、理性で理解できないものを一刀両断するために性的不調和

を描かなかった、というのは強引な指摘であるといえないだろうか。むしろ百合子の創作の主眼は自己の理想である知性と客観性を持つ理性的な女として伸子像を作り上げることにあつたのではないか。

百合子は荒木との結婚生活が二年目に差し掛かる頃「今日の女流作家と時代の交渉を論ず」¹⁶の中で「男性なれば極端な性欲或いは愛の葛藤も書け、そしてそれが批判される場合も、女性によつて書かれたもの程つまらない好奇心を起させますまい。」(九卷、一三六頁)と述べ、読者の下劣な言葉を気にする必要はないとしながらも、「つまらない好奇心」が女性の芸術性への評価を下げてしまう要因であるとしている。加えて「男は良人になり、父になり、益々その責任が強くなる。また社会人としても、その経験が広く深くなります。女は多くの場合(中略)娘時代から結婚時代へ、妻、母と典型的な生活にその日その日を送る女、其処から生れる芸術も自然、型の中で反省し得られる程度にしか出来ません。」(九卷、一三九頁)と記している。荒木との結婚生活で百合子は女性が生まれながらも背負う社会的抑圧や役割が女性の芸術性を妨げると考えていたことは確かである。しかし同時に、男性の芸術性への絶対的な期待と尊敬を持っていたことも読み取ることが出来る。

また、百合子は荒木との結婚生活を送っていた一九二〇年一

一月二三日の日記の中で、妹の弥栄が一年と五日で天逝しその際の父親と母親の悲しみ方を比較し、父親が棺の寸法を取る様子を見て、「男性の取るべき忍耐の深さ、強さに心を打たれ、頭を下げずには居られなかった」と記述している。一方で母親が涙ばかり流し、ただ悲しみを訴える様子を「女性が、生理的に男性より多くの苦痛——出産だの月経だのと云う——ものを持たなければならぬので、その本能的な、或は先天的構成によつて、先の苦痛の印象を忘れようとするのだらうか。」(二六卷、三一〇—三一頁)と分析している。百合子は女性が出産や月経という生理的苦痛を背負っているからこそ、それ以上の苦痛を涙によつて感情的に忘れようとし、さらにその感情的で印象的な女の性質のために思想的ではなくなってしまうことを恐れていたのである。

百合子は芸術性に関して女性の身体とそれを取り巻く社会背景に対する課題を常に感じており、男性と芸術性との結びつきへの憧憬と女であることによる葛藤が自己の内面に存在していたと言える。しかし『伸子』の作中では僕は芸術性や仕事への情熱に乏しい凡庸な男として描かれ、百合子が抱いていた男性の芸術性や社会的役割への期待を裏切る存在となつていく。一方で、荒木茂に着目した研究からは『伸子』では描かれない、百合子の持つ男性の芸術性や仕事への尊敬の対象となり得る荒

木の実像が浮かび上がり、『伸子』における佃の作為性が新たに見えてくるのである。

大野延胤は、宮内庁に直属する女子学習院の講師に、わずか一年で高等師範学校を退学しその後もアメリカに渡っていたために日本の正規教育を受けていない荒木が選ばれたのは、実力と人物本位の採用方針のためであると指摘する¹⁷。荒木の十五年のアメリカ滞在の中で得た英語力と苦行僧として取り組んでいた古代ペルシャ語の研究は百合子との日本での結婚生活から一年程経った一九二一年には実を結び始めていたと言える。しかし、『伸子』には佃が講師に決まったこと以外、佃の仕事ぶりは描かれない。また、大野はロンドン大学の音声学者のハロルド・E・パーマが日本で行おうとした英語教育改革事業に荒木が深く関わっていたが、そのことを百合子が『伸子』の構想段階で記したとされる「伸子」創作メモ¹⁸の中で「○パーマのこと」と書いていながら、小説の中では一切触れていないことも大野は指摘している¹⁹。

帰国後の荒木が百合子との生活の傍らで英語教育改革に尽力しつつ女子学習院の英語講師として教鞭をとっていたことは『伸子』で描かれる引きこもり気味の佃像からは想像し難い。『伸子』では佐々家で暮らすようになった佃が忙しさを理由に伸子の両親との団欒に加わらない場面では「決して大した仕事

ではない。イラン語の詩の古臭い翻訳を書きなおすか、下書きを敷いて、墨汁の罐に筆を出し入れしつつ、更に一通の履歴書を書いてるだろうことが分かってた。」（三巻、一四二―一四三頁）と皮肉っている。

百合子は荒木の言語学者としてのインテリな側面に惹かれたことは確かである。しかし佃を教育者として伸びていく存在として描かず、「自分のオリジナリテイの欠乏にも苦しまず、日本へペルシャ研究のための本を集める仲立ち」（三巻、一九〇頁）として描き出し、芸術性のない凡庸な学問に対峙するつまらない男としてのレッテル貼りをしている。こうして、荒木の仕事への評価は明らかに『伸子』の中で描かれた私生活における佃像によつて否定されることとなった。このように荒木を佃とし、凡庸な男として対置することで女である自身の芸術性や仕事に関わる葛藤と自尊心を際立たせた。同時に百合子が持つ男性の芸術性や社会的役割に対する絶対的な信頼に対する揺らぎの表れが示されているとも言える。

また、この揺らぎは『伸子』執筆期には既に生活を共にしていた湯浅芳子からの影響によると考えられる。

三 「官能の嵐」による性欲と愛の分離

『伸子』は一九二四年の荒木との離婚前後、ロシア文学者である湯浅芳子との交流のうちに書き始められており、作中では吉見素子として登場する。

『伸子』では佃との夫婦関係が悪化していく中、伸子の文学上の先輩であった檜崎佐保子の紹介で素子に出会うこととなる。伸子は初めて会った素子の印象を「我儘つ子らしい、感情家で勝気などところがあるらしい」（三巻、三二六頁）と表現している。二人は手紙のやり取りなどを通して親交を深め、素子が伸子のいる開成山を訪れる場面も描かれる。伸子が素子からの手紙を何度も読み返す場面では、結婚生活における苦悩について「愛のある皮肉で応答してよこした」（三巻、三四二頁）素子に夢中になっている様子が分かる。『伸子』における素子像は一貫して自立した女として伸子の憧れの対象であった。しかし、『伸子』では伸子と素子の詳細な関係が描かれることなく、終盤では佃と伸子が別れへ向かっていく場面に焦点が絞られていく。『伸子』の最後の場面ではこれまで伸子が求めるばかりであり、「恩恵的行為」とされてきた夫婦間の性行為が佃からの積極的な「官能の嵐」として描かれる。

佃は官能の嵐で、伸子の心を引きさらい、また自分の中へ取り戻そうとするようであった。伸子は初め拒絶した。が、終りに、烈しく泣きつつ自分から荒々しい悲しみで彼の抱擁の下に身を投げた。彼女は自らを傷ける底知れぬ苦しさで、動乱する官能の火花との間に漂いながら、最後という字が、大きく大きく物を云いそうに、自分たち悲しき男女の体の上に書かれているのを知った。（三巻、三五四頁）

「官能の嵐」に応えながらも最終的に佃の愛には応えない伸子が描かれることで別れの伏線となっており、伸子が「飼鳥になつては堪らない」（三巻、三五八頁）と別れを突きつける場面で『伸子』は終わる。

一方で『伸子』の終盤にあたる時期と考えられる一九二四年六月六日の日記では「官能の嵐」の後に「そして、一種の反動疲労から来た無気力で和解してしまった。」（二七巻、三〇一頁）と記されている。『伸子』で描かれる結末とは異なり、百合子は荒木と一度は和解していたのである。黒澤亜里子は、百合子から荒木との和解を知らされた芳子の書簡について「私はむしろ、あなたが私の顔をみるなり、『ああとうとうダメ。どうしても強くなれないでもとへ帰ることにしてしまったのよ』と言ったら、（中略）子供をいたわるような気持でああなたの頭

髪を撫でる事を忘れなかつたでしょう。しかしあの態度では！」（一九二四年六月一〇日、芳子書簡）と書かれており、百合子の「恋愛」対象が異性であれば起こり得ない無自覚な「和解」の告白であつたと指摘する。また、百合子が芳子を傷つけたことに自己嫌悪に陥つていたとも述べている²⁰。そのため実際には、荒木と正式な離婚に踏み切るまでには時間を要しており『伸子』で語られているような潔い別れではなかつたうえに、芳子の介入があつたことは明らかである。『伸子』での伸子と佃の最後の場面は実際の百合子と荒木の離婚の事実とは異なつており、雑誌初出においても素子が佃との別れのきつかけになつたことは一切書かれておらず主体的に離婚を選択する伸子が際立つており、同じことが言える。

中村智子は伸子の離婚の過程に素子が登場しないことを、激情によつて離婚に介入した芳子への遠慮があつたためであろうかと述べている²¹。しかし、百合子が芳子への遠慮を持つていたのであれば、芳子との関係の中で伸子と佃との「官能の嵐」を描く必要はあつたのだろうか。

百合子が『伸子』で離婚に介入する素子を描くことなく、伸子自身の意思であるかのように「官能の嵐」の後に佃との決別を感じさせる結末を描いた理由として以下の二点が考えられる。一つは性欲と愛情の別を百合子が自覚したこと。もう一つは男

性と芸術性との結びつきへの信頼を持つていた百合子がそれを裏切る佃を描くことで、主体的に「極端な性欲或いは愛の葛藤も書け」る可能性を芳子との関係のなかで見出したことである。百合子は芳子との書簡の中で自身の官能のあり方に対する考えについて以下のように記している。

（前略）愛情で亢奮する場合と、慾情の場合と、ひどく官能の上で違ふ。本当に嬉しい、可愛いという心持だけで抱き合つたとき、それは成熟した女性として、生理的な準備は自から出来ても、肉慾的に享樂しない。ホールプロセス、それ自身をエンジヨウイする以上燃え切るものがある。ところが、そうでなく、いやに肉感的である場合（心に敬意があると決して私はそうなれない。）相手の人格は消滅し、慾望に対する慾望の存在だけ。（一九二四年六月一五日、百合子書簡）

黒澤はこの書簡について、百合子は「愛情」と「慾情」が一つに溶け合つた「ホールプロセス」こそが重要であり、「肉欲」だけでは十分ではないとし、そのうえで夫婦生活を経験した自分だからこそ芳子の価値が分かるのだと考えていると指摘する。また、セクシュアリティや性生活への意見は芳子に百合子に対

する信頼を持たせることになったと述べている²²。『伸子』では「官能の嵐」に応える一方で佃との愛を再構築することは出来ない伸子を描いた。そして百合子は共に生活し、かつ百合子にとつて肉体的欲求の対象と出来ない性である芳子に、愛と性欲が別のものであることを示すことで芳子への愛情を強固なものとした。

また、百合子が芳子へ傾倒した要因に、自身の芸術性を鼓舞することが出来る同性であったことが挙げられる。黒澤は百合子が母親からの期待や育ちの良さからくる理想家肌の性格から外聞を気にする性格であったとも言えるとし、芳子がそのような性格を「奥さんのお嬢さんの偏狭」（一九二四年六月三日、芳子書簡）と呼び、創作家としてそこからもう一つ抜けても良いと述べている点に着目している²³。また、百合子は一九二四年一〇月八日の日記で、以下のように述べる。

自分は彼女を全然自分の味方と信じ得る。競争者でもなく、わが仲間だ。彼にはそうでなかった。絶えざる自己防衛——彼に似まい、彼に感化されまい、という努力、緊張、批判が絶えなかった。自分はつまり彼の人としての価値を一向信じなかったことになる——（中略）私の中には、男性と本能的にライバルになる何かがあるのではないだろう

か。（二七巻、三三二頁）

この記述から黒澤は、百合子が夫である荒木に「女／妻」としての愛を向けられることはある部分では喜びながらも、望んでいたのは「人間／芸術家」としての自尊心であり、百合子は芳子によって「創作家としてそこからもう一つ抜けても良い」と真の「人間／芸術家」としての自尊心を呼び覚まされたことが分かる指摘している²⁴。百合子は荒木が男性である以上自身の芸術家としての自尊心を保つことが不可能であったのである。百合子が女性の思想性の無さは、女性の抱える生理的苦痛からくるものであると考えていた以上、百合子を女たらしめる夫の存在は許せないものとなっていた。

また、「伸子」創作メモ（二）²⁵のなかには以下のような記述がある。

- 自分は何かにかつえて居る、という心持
- 愛を求めすぎるといふ考、
- 自立する生活について考える。
- それを見ると思われるのがいやさ

+

○男から男へと行くのはいやという考え。

(二〇卷、四七六頁)

「自分は何かにかつて居る、という心持」、「愛を求めすぎるという考」という記述からは、百合子が結婚生活の中で自身の肉体的欲求が浮き彫りになることで愛の欠乏を感じていたことが伺える。さらに『伸子』の構想段階で「男から男へと行くのはいや」という、伸子を通じた異性関係からの脱出を図っていたことは明白である。それは単に異性との結婚によって生じる妻という立場や出産などの生理的苦痛を伴う役割を否定するためだけではなく、百合子が異性との関係を断ち切ろうとしたことは、自身が日記の中でも脱しなければならぬと述べている肉欲的な欲求からの離脱への試みでもあったのである。また、芳子の存在が結婚に縛られた異性関係からの脱却というテーマを『伸子』に与えたことは間違いない。一方、芳子に深く傾倒する百合子であったが一九二五年三月一日の日記中には以下のように書かれている。

昨夜Y、いろいろの話のことから、私に情熱は在るが愛の深さは自分より劣ると云った。

その言葉忘れず。

自分の結婚したやり方など全く情熱的であった。そしてそれを完成されなかったのは愛の不足と云えなくもない点あり。実に忘れない一句。(二七卷、三四〇頁)

百合子は共同生活が始まったばかりの頃から芳子に愛の深さが自分には劣るものだと指摘されている。それは荒木との結婚生活でも同様であり、芳子との関係も停滞を見せ始める。

四 肉体的欲求の再燃から「心や官能の生長」へ

——「一本の花」

百合子は芳子とのやり取りの中で女の性欲について、愛情と性欲が別のものであると同時に異性との関係においてそれが一体化する事への意義を見出した。そして『伸子』での佃との離婚を巡るやり取りでは「官能の嵐」には応えながらも、佃の愛には応えない伸子を描くことで芳子の気持ちに応えている。しかし、二人の生活が停滞を見せ始める一九二七年四月一五日の日記では芳子には求めることのできない、異性との恋愛を再び思慕する様子が見えてくる。

○自分この頃いかによきYでも彼女の力でどうにもしてく

られない「ママ」ものを懂れて居る。日々新たなもの、この過ぎゆく人生の柱となるものにふれたい、その心持なり。一人のひとを愛し、その人から新たな愛——恋を味わいたい自分。(二二八巻、三二頁)

「よきYでも彼女の力でどうにもしてくれられないもの」とは、芳子との生活の中では満たすことのできない恋、性欲の問題、つまり肉体的欲求の再燃であるとも言える。また同年六月七日の日記でも同様のことを記している。

○自分等の生活には段々恋愛雰囲気とは違った肉親的愛がひろい部分をしめて来た。それ故時に(それで我々はよいのだ、自然なのだが)官能の懂れを感じず。恋を恋すような心持。(微妙なものと思う。夫婦ならこのように肉親的愛が互の間につよくても官能は存在する。女性同士の間ではそれが無い。そこにある自然の動かしがたき力)恋を恋う心を、自分はどのように生かしてゆくか。——何故なら、自分は無条件で恋愛の発展過程を(恋愛、結婚、結婚の解釈)承認出来ず、又所謂モダンに、現代文明のネゲティブの影響も受けられず、新しき価値を見出さないでは居られぬから。(二二八巻、四二頁)

このような日記が記された頃、同性との、ある意味で禁欲的な生活の中で、性的不調和の再来を感じさせる作品が描かれている。それは女同士の生活の中で親愛を深めようとする朝子と幸子が描かれた「一本の花」である。瀬戸内寂聴は、女同士の生活の中で表れた肉欲に耐えかねた百合子がそれを消化させるうえで「一本の花」を描いたと評価している²⁶。芳子との共同生活のうちに書いた「一本の花」は、未亡人で機関雑誌の編集の仕事をする朝子と女子大学で心理学を教える幸子の女同士の生活と朝子を取り巻く社会の人間関係に対する自身のセクシュアリティを通したまなざしを描いた作品である。この作品では朝子が仕事で原稿依頼に訪れた藤堂宅での夫婦関係について「夫婦生活の精力が強く支配している」(三巻、五四七頁)と表すなど、周辺社会や結婚生活に対しての百合子自身のセクシュアリティを通した洞察がより鋭いものになっている。

また、「一本の花」では結婚という制度から外れた朝子のうちに湧き出る肉体的欲求は『伸子』での佃から与えられる「恩惠的行為」のような否定的なものとしては描かれていない。

朝子は幸子の従兄妹である大平とのやり取りを通して自身の異性に對し沸き上がる欲求を自覚すると同時に、それを「心や官能の生長」と表現する。朝子は大平から「——変わりもんと士で、面白くやってゆけると思うんだがな……自由に……」

(三卷、五六二頁)と突然のプロポーズともとれる言葉を受けるが、その際自分が大平と話している間に、愛情を向けていたはずの幸子の存在を忘れていたことに気が付く。そして朝子は一人の男として大平が自分の中に現れるのと同時に発作のような肉体的欲求を感じるのである。

その発作のような瞬間、朝子は自分の肉体の裡で、大きな花弁が渦巻き開き、声なき叫びで心に押しよせるように切なく感じるのであった。(三卷、五六六―五六七頁)

転退を欲する本能、一思いに目を瞑って墜落したい狂的な欲望、そういうものだけが、やがて朝子の心の中に残った。それらの欲望が跳梁するとき、常に仲介者として、大平の存在が、朝子の念頭から離れぬ。(三卷、五六八頁)

そして朝子はこのような狂的な欲望は結婚生活を経た自分だからこそ得ることが出来た「心や官能の生長」と見出している。

若し今まで結婚生活が続いていたら、自分はこのように細かに、何か木の芽でも育つのを見守るように心や官能の生長を自分に味うことが出来たであろうか。(三卷、五六五

頁)

岩淵は「一本の花」は実生活とは異なる自立した世界であると捉え、実生活に還元した理解には踏み込まないとしつつ、同性愛が異端と見なされる時代に書かれたものであり、こうした性に対する暗黙の制度を視野にいれつつ、花ばなに囲まれ、自身の内面にも花を咲かせた朝子の深層の物語であると位置づけている。そして朝子は結婚生活が続いていれば「心や官能の生長」は妨げられると考えており、そこに朝子が次の結婚を拒んだ理由があると指摘する²⁷。この「心や官能の生長」の発現から『伸子』では描かれなかった性的不調和や百合子自身の性欲への葛藤に一つの答えが導き出されたことが分かる。百合子にとつて自身の性欲の自覚は結婚生活が無ければ生まれなかった「心や官能の生長」となり、『伸子』で描かれる結婚生活のうちの伸子はまだ「心や官能の生長」を自覚しない存在でなければならなかったのである。

また、大平への肉体的欲求を自覚しながらも、愛とは異なるものとして幸子への愛情を再確認した朝子が最後に電車から一人の男を見つめる場面がある。

黒い詰襟服の監督らしい髭のある四〇前後の男が、そこに

立っていた。何か頻りに見ている。鏡のようだ。よく見たら、彼の手にあるのは女持ちのコムパクトであった。捨てたのだろう。彼は偶然停った満員電車の中から観ている者があろうとは心づこうはずなく、(中略)今度はコムパクトを珍しそうに、とう見、こう見していたが、やがて蓋をあけ中についている鏡で自分の顔をちよつと見た。それは直ぐやめ、今度はコムパクトの方を鼻に近づけ白粉の匂いを嗅いだ——トラックや自転車の行き交う周囲の雑踏を忘れた情景であった。その位長く彼は嗅いだ。(三巻、五七八頁)

この描写からは、白粉の匂いを嗅ぐ男がその匂いから女を連想していると考えられ、「女持ちのコムパクト」の白粉の匂いは男の性欲を掻き立てていること暗示していると見える。「観ている者がある」とは心づこうはずなく」と思いながらその情景を眺める朝子は、結婚という制度の外で「肉体の裡に、大きな花弁が渦巻き開いた女性であるからこそ、男にとつて「女持ちのコムパクト」が持つ意味を理解できる存在となつている。百合子は「一本の花」によつて、女同士の生活の中で生じる肉体的欲求を「心や官能の生長」として肯定的に捉え、芳子に向ける愛情とは別のものとして示した。しかし、実態としては

芳子との関係も行き詰まりをみせることとなる。そして共同生活が始まった頃に芳子が懸念していた通り百合子の愛は一時の情熱として、外の世界に向けられていくこととなる。

結論

『伸子』では百合子自身を持つ肉体的欲求や女性の芸術性への葛藤を軸に、伸子を理想的な自己像として描いたことによつて、雑誌初出の佃像との差異が生じていることが明らかになった。また、「一本の花」は百合子と芳子の女同士の生活をモデルにしていることから『二つの庭』との関連性を論じられることが多いが、執筆時期からも『伸子』の背景にあつた百合子の愛と性欲の問題を引き継ぎ、自身に沸き上がる性欲を「心や官能の生長」として昇華していると見える。さらに『伸子』と「一本の花」は肉体的欲求の問題について連続性を持つており、百合子の自身の性とセクシュアリティに関する葛藤を抱えつつ執筆された二作品は、非常に女としての身体の感覚に即して描かれたものであるうえに、百合子がそれぞれのヒロインに理想の自己像を投影した作品である。百合子が日記やあらゆる小作品からの推敲によつて最も理想的な自己として伸子や朝子といったヒロインを生み出し、『伸子』、「一本の花」を書きあげ

た点は評価することが出来る。

『伸子』以後を扱う『二つの庭』では百合子は自身の成長を湯浅芳子との生活のうちに求めていくことになる。『二つの庭』は『伸子』の執筆から二〇年近い年月を経ているうえに、再び結婚生活の中で描かれている。百合子の思想的成長や百合子と宮本顕治との間に生じるセクシュアリティの問題が作中人物にどのような投影されているか考察が及ばなかったため今後の課題とした。

注

- 1 『宮本百合子全集』第三卷所収、新日本出版社、二〇〇一年。本稿での宮本百合子の著作、日記からの引用は、原則『宮本百合子全集』、全三十三巻、新日本出版社、二〇〇〇—二〇〇四年に依拠する。引用の際は本文中に巻数、頁数を記載する。
- 2 岩淵宏子『伸子—仕事と愛と』宮本百合子 家族、政治、そしてフェミニズム 翰林書房、一九九六年。
- 3 遠藤伸治「宮本百合子『伸子』—主体における切断と重層について—」『国文学攷』（一七五）、広島大学国語国文学会、二〇〇二年。
- 4 『宮本百合子全集』第三巻、五八九—五九一頁、『伸子』解題に記載。
- 5 本稿での雑誌初出の引用は雑誌『改造』改造社、一九二四年九月号—一九二六年九月号に依拠する。引用の際は本文中に号数、頁数を

記載する。また、旧字体は新字体に改めている。

- 6 津田孝「歴史のなかの伸子—『伸子』の改作問題を考える」『民主文学』（四〇〇）、日本民主主義文学同盟。
- 7 岩淵宏子『伸子』創作過程への一考察、『日本女子大学紀要文学部』（二六）日本女子大学、一九七六年。
- 8 『宮本百合子全集』第三卷所収、初出は『改造』改造社、一九二七年二月号。
- 9 本稿での書簡の引用は黒澤亜里子『往復書簡 宮本百合子と湯浅芳子』翰林書房、二〇〇八年に依拠する。
- 10 『宮本百合子全集』第六卷所収、初出は『中央公論』中央公論社、一九四七年一月号—九月号。
- 11 佐藤静夫『宮本百合子と同時代の文学』森の泉社、二〇〇一年、二一八—二一九頁。「宮本百合子選集第六巻」のあとがきは『宮本百合子全集』第十八巻、一三六頁—一四〇頁に収録されている。
- 12 『宮本百合子全集』第十一巻所収、三七六—三八四頁、初出不詳
- 13 沼沢和子「百合子と家、家族」『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、二〇〇六年四月号、二九頁。
- 14 岩淵宏子、『伸子』創作過程への一考察、一九七六年、三五頁。
- 15 同右、四〇頁。
- 16 『宮本百合子全集』第九巻所収、一三五頁—一三九頁。『読売新聞』一九二三年五月三三日、六月一日、二日号に連載の談話。

- 17 大野延胤『風の如くに』近代文藝社、一九九五年、三六一―三七頁。
- 18 『宮本百合子全集』第二十卷所収、四五八頁―四八六頁、一九二四年、「伸子」創作メモ（一）―（四）まであり、原稿用紙に升目を入れずに書かれた覚え書が『宮本百合子全集』に収録されている。
- 19 大野延胤「荒木茂小伝」『学習院女子短期大学紀要』学習院女子短期大学、一九八七年、二七頁。
- 20 黒澤亜里子、「Y・Y・カンパニー論」前掲書、五九五―五九八頁。
- 21 中村智子、前掲書、九〇頁。
- 22 黒澤亜里子、前掲書、六〇八―六〇九頁。
- 23 同右、六〇〇頁。
- 24 同右、六〇二頁。
- 25 脚注18に同じ。一九二四、五年に書かれたとされる。
- 26 瀬戸内寂聴『孤高の人』ちくま文庫、二〇〇七年、二五二頁。
- 27 岩淵宏子「一本の花」『宮本百合子 家族、政治、そしてフェミニズム』翰林書房、一九九六年、一二八―一二九頁。